

研究ノート

幣原坦の教育関係資料について

— 広島高等師範学校第二代校長在職時まで —

田 中 卓 也

「はじめに」 生い立ちと教育への関心

本稿では、明治期から大正期にかけてのわが国の教育行政官であり、広島高等師範学校の第二代校長を務めた幣原坦の教育思想・実践に迫るものである。また彼の教育への取り組みに関する文献資料について国立国会図書館、広島大学文書館等に所蔵されている資料を用いている。

幣原坦は一八七〇（明治三）年に大阪府北河内郡門真村（現在の大阪府守口市）に誕生した¹。父は地元の豪農として知られていた。名前の「坦」の由来は、「論語」にある「君子坦蕩々」の句言から採用したものとされる。教育熱心な父のもとで、論語や謡曲などを習いながら、幣原は様々な知識を習得していくことになった。小学校時代においても、小説家として知られる武田仰天子に目をかけられ、幣原への訓育の指導においても余念がなかったとされる。

官立の大阪中学校に入学をはたした幣原は、ますます勉学の道へと邁進した。大阪中学校は一八八六（明治一九）年に出された「学校令」

にもとづき、「第三高等中学校」と改称された。この学校を卒業した彼は「帝国大学文科大学」に入学した。以後坦は「学校畑」を歩み続けることとなる。

卒業後は、鹿児島高等学校造士館教授、山梨県立中学校長、東京高等師範学校教授などを歴任し、中等・高等教育の発展に尽力していくことになった。

【一】著書『女子教育』について

彼は、一八九八（明治三一）年二月に著書『女子教育』を刊行した。彼はその「德育論」において、『女子教育』の内容について「緒言」では、次のように述べている²。

故日高文科大学教授、教育の講演を聞くに当りて謂て曰はく、余は是より教育史の一斑を陳ぜんと欲す。何とならば、余は教育の歴史を以て教育学の一たりと信ずればなりと。嗚呼歴史は先人の

経験なり。経験の重んずべきはあに亦弁を要せんや。近時女子教育のこと、漸く世人の念頭に浮び来らんとし、而も是に関せる書は未だ多きを加へず。偶々坊間に散見せるものも、皆女子教育の議論のみにして、観察を歴史的より下したるは、不幸にして余の見聞せざる所とす。余や不才、敢て此の欠点を補ふの概あるにあらずと雖、頃日女子教育の依頼を蒙るに遇ひ、聊研学の余暇に乗じて、東西古今の女子教育中、我国現時の注意すべき事項を考查し、咄嗟筆をおろして、此編を成す。素より参考に資すべきものに乏しく、亦泰西の現況に至りては、身自ら實際を踏査せざれむ隔靴搔痒の感あり。是に於て乎記事簡略に、之に加ふるに行文の渋滞を以てす。願わくは大方諸賢の教を受けて、更に完成を期せんのみ

また、そのなかで「德育」について、彼は次のように述べている。³⁾

第一節 德育論

凡そ一国には一国の風儀あり。苟も国風なければ、未だ強固たる邦家をなせるものとはいふ可からざるなり。己に一国の風あるが以上は、漫りに之を破却して他国に擬す。所謂江南の橋樹たるを免れざるのみ。嘗て聞く邦人其女史、瑞西国に遊びて一女学校を過ぎ、女生の軍艦を作りて之を池中に浮ぶを見、其女子の為すべき事に属せざるを怪しみて之を校長に問ふ。校長憮然として答えて曰く、これ在来の風儀のみ、而も此心をかりしせば、いづく

ぞ能く我弾丸黒子の小国を維持するを得んやと。風儀の漫りに破る可からざる概ね此類なり。我邦は久しく和順貞淑を以て女子の風儀となし来れることなれば、今之を壊滅して頓ふ欧米の習俗を植えんとす。女子の婦徳は、学校内にありても之を養ふべきと論を待たず。特に寄宿舎の設備ある所に於ては、最然りとす。然りと雖、現今の状況にては、家庭に於て最注意を怠るべからざるものあり。何とならば、女子は概して男子よりも早熟するものなるを以て、生れてより高等小学に至るまでに、其生涯の氣質を養成せらるることと鮮しとせず。又これより高等女学校に通学することとなりて、間もなく結婚期に達するに至るまでも、多くの時間は家庭に費すに外ならず

「德育」に関心を持っていた幣原は、「女子の婦徳」の涵養の大切さを主張している。そこでは婦徳は、「学校内にありても之を養ふべきと論を待たず。特に寄宿舎の設備ある所に於ては、最然りとす」とあるように、彼女らが生活する寄宿舎内は婦徳が涵養されやすい場所であると言及した。多くの女子による「寮生活」を通し、「其生涯の氣質を養成せらるることと鮮しとせず」ほどの影響力をもつ重要な場所であることを、幣原は語るのである。すなわち「気風」の醸成の重要性を幣原は指摘している。

〔二〕著書『教育漫筆』について

前著に続き一九〇二（明治三五）年六月、幣原は『教育漫筆』なる著書を発刊した。同書のなかで彼は「校風養成」について次のように述べている。⁴

余輩は前にも一言せしが如く、生徒の一挙一動に干渉して、之を牽束するを理想とする者にあらず。即ち規律といふことに趨せて、心身の活気を錬磨せしむるがごときあらば、これ国民を挙げて傀儡となすものなり。余輩至愚と雖、あに国民を傀儡となして得たりとする者ならんや。此点に於ては、余輩は寧ろ現今の中学校が師範学校と趣を異にせる所あるを喜はずんばあらず。余輩は素より天賦の良能を円満に暢達せしむるを以て、教育の要旨たりと思惟する者なり。然りと雖、天真の爛漫は流れて荒蕩となり、無邪気は流れて瀨惰となり、遂に誤つて墮落腐敗の弊竇に陥らしむる時は、子弟教養の面目立たざるが故に、幼時に良俗美風を馴致せしめて、他日国家の一員として諸種の義務を果し、事を処して整然乱れざるの謹勉と、善を為すに勇なるの策励とを自発せしめんとする。期する所は、束縛なき規律に達せしめんこと即ち是のみ校風養成の一斑は、己上、縷陳せる所の如し。更言すれば、剛健の心情を持して、節操を励み、和平寛厚の度量を養ふは、我邦現時の中学に於て、余輩の最も須要と感ずる所なり。遜思邈曰はく、『胆は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲し、智は円な

らんことを欲し、行は方ならんことを欲す』と。蓋し志を立てて事を成さんとする者の座右の銘たらむ。校風の養成は一朝一夕にあらず、而して之を行ふの方法は種々あるべし。茲に余輩の思ふ所を以てするも、已に二三の考案あるを見る。人物伝の読誦も其一なり。上級会の組織も其一なり。

「校風の養成は一朝一夕にあらず、而して之を行ふの方法は種々あるべし。茲に余輩の思ふ所を以てするも、已に二三の考案あるを見る。人物伝の読誦も其一なり。上級会の組織も其一なり」と述べる幣原であつたが、校風養成の二つの方策について、彼は著書においてどのよう述べているのであろうか。

「人物伝の読誦」について、幣原は次のように述べる。⁵

人物伝の読誦とは、日を期し、時を定めて、師弟一同に会し、偉人の伝記を読み、若くは其の事業を講ずること即ち是なり。例へば薩藩に行はれし九月十五日の関ヶ原合戦記の会読、十二月十四日の赤穂義臣伝の会読に於けるが如くにして士氣堂に満ち、殊に十二月の寒天、窓外偶々六花の塵紛たることあらん乎。壮心為に寸断するの思ありきといへり。余輩は時勢の推移を知るが、故に必しも関ヶ原合戦記、赤穂義臣伝を取るべしといふにあらず、唯かかる機会に衆庶の胸襟を純潔にするの方法を講ずるは、校風養成の一助たらんと思惟するものなり。

「師弟一同に会し、偉人の伝記を読み、若くは其の事業を講ずる」とする「人物伝の読誦」は、「衆庶の胸襟を純潔にするの方法を講ずるは、校風養成の一助たらんと思惟するものなり」と述べているように、校風養成の方策の一つであった。幣原自身ものちにスイスの教育活動家として知られるペスタロッチに傾倒し、「ペスタロッチ研究会」を組織することに尽力したことからもわかる。

また「上級会の組織」について彼はつぎのように語っている。⁶⁾

又前にも述べたる如く、中学時代は人生の一大変遷期なるを以て、下級は未だ幼稚の可憐児より成れりと雖、上級にありては、各一生の性格を成すに至らんとする生徒を多しとす。而して此上級の生徒たるや、已に数年間中学の生活に慣れ、多少其学校の内情にも通じ、又年齢も全校生徒より長せるを以て、是等の生徒より組織せらるる一会を起し、監督者の意を伝へて、校風の養成に尽力する所あらしめば如何乎。かくの如くする時は、卒業する生徒は、自己の学校に尽せる功績を明かにすべき名誉を有すると共に、又他日公共の爲にするの素養たるにらむ。之を要するに、校風の勢力と好果とは、主として生徒間に求むべきは言を俟たず。然りと雖、校風発動の源は、教師の品性と風化とに基づくこと多きに居る。是に於て余輩は益々、教師に人物を得んことを熱望する(以下略)

「生徒より組織せらるる一会を起し、監督者の意を伝へて、校風の養

成に尽力する所あらしめば如何乎」と述べるように、生徒の自主性から、会を組織運営していくところが、「校風の養成」がなされていくものであると述べている。生徒の指導も校風発揚の一方策であったのであろう。また「校風の勢力と好果とは、主として生徒間に求むべきは言を俟たず。然りと雖、校風発動の源は、教師の品性と風化とに基づくこと多きに居る。是に於て余輩は益々、教師に人物を得んことを熱望する」と述べる幣原には、「校風の勢力と好果」は、品性のある教師からはじまるものであるとし、教師の人格が大切であると説いているのである。

【三】『学校論』について

一九〇九(明治四二)年九月に彼は、『学校論』といわれる著書を刊行した。全二七〇頁から成る大著であるその目次を見てみると「国民的鍛錬論」、「躰論」、「学校内外連絡論」、「修身教授及操行調査論」、「特殊訓育論」、「寄宿舎論」、「夏冬休暇論」、「運動会及遠足論」、「儀式論」、「試験論」、「予習復習及練習論」、「教授効果論」、「時間活用論」、「教具論」、「自修論」といった彼の学校教育論の重要な柱となる一五項目として列挙されている。

「躰論」の「第二節 自宅及宿所に於ける躰」という項目において、幣原は「生徒の自治を主とする監督 通学生をして互いに品行を慎しませしめ、自治の本領を發揮せしめんが爲に、義勇団、同級会、興風会等を設けて、生徒監督に之を隷属せしめ、其団友、及会友の行に就て

は、団体がその責を分ち、他団の者に就ての見聞も、之を学校に報告せしむる」とあり、「生徒の自治」を主におきながらも、「其団友、及会友の行に就ては、団体がその責を分ち、他団の者に就ての見聞も、之を学校に報告せしむる」よう、厳格な生徒管理が実施されるようになっていた。⁷⁾ また「第三章学校内外連絡論」の「第二節学校と社会との連絡」という項目では、「同窓会」について挙げている。幣原は次のように述べる。⁸⁾

(一) 同窓会

是は学校の卒業生の会であるが、小学校に於て最も顕著なる効果を挙げている。即ち小学教師が、在学中の児童の教養に止めずして、更に卒業後の指導を同窓会に於て行つてゐる。又卒業後曾在学したる者が、どんな風になつて行くのかと云ふ、経過の調査も面白いのである。此の経過の調査並びに、卒業生の指導は、師範学校に於ては、素より必要とすべきであらうが、小学校の如き、中等学校に於ても、教育上すこぶる価値があると思ふ(中略)又願はくば、いかなる勢力家たりとも、其地方にあつては、成るべく同窓会に出席をして、師弟の情誼を温むべきである。否寧ろ同窓会に出席するを名譽とする風が、起らんことを冀ふのである。かくて是等が皆学校の主義方針を助成するの後援者となつたならば、学校の経営は頗る容易になるのである。

幣原は「卒業生の指導は、師範学校に於ては、素より必要とすべきで

あらうが、小学校の如き、中等学校に於ても、教育上すこぶる価値があると思ふ(中略)又願はくば、いかなる勢力家たりとも、其地方にあつては、成るべく同窓会に出席をして、師弟の情誼を温むべきである」と諸学校における同窓会の「教育上」の「価値」あるものとして捉えている。

しかしながら、「否寧ろ同窓会に出席するを名譽とする風が、起らんことを冀ふのである。かくて是等が皆学校の主義方針を助成するの後援者となつたならば、学校の経営は頗る容易になるのである」と同窓会の組織の後援者として学校経営に利用できるとする経営者としての持論を語つてゐることもうかがえよう。

「如上の立脚地に立つて、此の学校論一編は組み建てられたのである」と彼が述べる『学校論』は、彼の教育の集大成であつたのではないだろうか。以前に彼が刊行した『女子教育』、『教育漫筆』などの内容も盛り込まれた同書は、まさしく幣原の学校教育の考えをまとめたものであり、これまでの教職経験などにいかされたものであつたかもしれない。⁹⁾

〔四〕広島高等師範学校校長に

教育行政家としても活躍した幣原は、一九一三(大正二)年に再び教育現場に復帰を果たすことになった。当時広島高等師範学校同窓会が発刊していた『尚志同窓会誌』には、当時の心情について次のように語つてゐた。¹⁰⁾

私は教育社会に出でて二十七年になるが、その中地方にあったこと(中略)この間に私は種々の経験をしました。鹿児島では書生上りで、まだ教育の意味を十分理解して居なかつた。山梨中学校に至つて漸く教育に興味を覚へ、青年に引付られる気分を知つた。一身を捨てる覚悟を起したのは、朝鮮と広島である。朝鮮では始めの中は山梨のこと等が憶はれて、日本に帰りた、日本の青年をもつと教育したいと思はれてならなかつた。然し茲朝鮮の事情も知れ、教育制度の不完全なのを見、朝鮮の青年の憐れむべき情態を目撃して、漸次朝鮮の教育事業に興味を持つていつた(中略)やがて政変が続いて統監府が置かれた。私は顧問の必要のなくなつたのを見て、辞表を提出して、日本に帰つたのである。人生は実に定まらないものである

「教育社会に出でて二十七年」を経た幣原は、「種々の経験をし」たと述べている。そのなかでも彼は「青年に引付られる気分を知」り、やがて「一身を捨てる覚悟を起したのは、朝鮮と広島である」と豪語している。真正面から「青年」とぶつかることで、幣原は教育者として一回り大きく成長する契機になったのかもしれない。さらに青年教育に心血を素そぐため、広島の地に存立する高等師範学校にてそれを実施しようとしていたのであろう。

彼は「広島高等師範学校」(現在の広島大学の前身)に第二代校長として赴任することになった。一九〇二(明治三五)年創設の同校は、初代校長北条時敬によって学校運営がなされてきたのであるが、東北

帝国大学総長へ北条の転任を機に、それを受けるかたちでの校長着任であった。

着任した頃の幣原については、『尚志同窓会誌』第二六号に足立武樹なる人物により、その歓迎会の様子についての記事が書かれている。その記事より当時の事情をうかがうことにする。¹⁾

広島高等師範学校には既に卒業生を十回以上出して居るが、其の間に一つの善美なる校風といふものが養はれて居る。自分は旧卒業生が築かれた其の校風を十分尊重して之を持続したいと思つて居る。であるから大体は左程変らないのであるが、時勢の推移と共に、多少新しく考えねばならぬ事もある。其の新しく考へた一二の例を述べてみると、先づ自分は新しき教師を立派に造り立てる事が甚だ緊要であると共に、現在教師になつて居る人に更に一層の修養をつませる機会を与へたいと思ふのである

この記事は、幣原の講話を足立がのちに筆記したものとされるが、このなかで幣原は「善美なる校風といふものが養はれている。自分は卒業生が築かれた校風を十分尊重して之を持続したいと思つて居る」と校風の養成とさらなる継続を強く感じていることに気づく。また校風の養成策として「自分は新しき教師を立派に造り立てる事が甚だ緊要であると共に、現在教師になつて居る人に更に一層の修養をつませる機会を与へたいと思ふ」と立派な教師の養成さらには、その養成方法において「修養」を重んじていることがわかる。

これまで「尚志同窓会」については、名和弘彦編『尚志会創立八十年記念』（社団法人尚志会、一九八七年）のなかでも詳細にふれられている。尚志会の誕生については、広島高等師範学校初代校長北条時敬による創設として知られている。第一回の卒業式において卒業生八十七名の前で北条は次のように訓示している。¹²

卒業生諸子、本校ハ慈ニ貴賓ノ臨場ヲ請ヒ此ノ式ヲ挙ゲテ、以テ諸子ノ本校所定ノ課程ヲ修メ了リ。師範学校中学校及高等女学校ノ教師タル必要ナル資格ヲ具備スルコトヲ証明ス。明治三十五年本校ノ創設セラルルニ方リ、諸子ハ国家ノ教育ニ身ヲ委ネ翼賛セント欲スル志ヲ抱キテ本校ニ入り、爾来研鑽ノ効成リテ本日第一回卒業生タルノ榮譽ト責務ヲ荷フニ至レルハ、亦国家教育ノ為ニ賀スベキナリ。独リ諸子の為ニ喜フベキノミナラズ。諸子今後教職ニ就カバ我が国建業ノ基礎ト歴史ニ鑑ミ、現時列国ト講交スルノ態勢ヲ思ヒ、聖勅ノ謂意ヲ奉ジ、銳意勤勉以テ国運隆盛ニ資スベキ一分ノ責ヲ全ウスルコトヲ期セヨ。是レ昌代ノ恩遇ニ報ズル所以ニシテ、又諸子ノ志ヲ成ス所以ナリ。諸子旃ヲ勉メヨ

北条校長をはじめ多くの教師らより、「師範学校中学校及高等女学校ノ教師タル必要ナル資格ヲ具備スルコトヲ証明」された卒業生は、それぞれに決意も新たにしながら教育界に羽ばたくことになったのであろう。

この第一回卒業生を出すことになってから同窓会設立の気運が高ま

ることになった。一九〇七（明治四〇）年一月一日、母校の開校記念日において、一二名の同窓生が広島に集結し、同窓会結成において賛同を得ることとなり、池田多助、岡田徹平、中川直亮ら六名を創立委員に選出し、数回の会合を重ねて検討を試み、校長の北条、庶務課長であった赤木万次郎らの意見を参考とすることで、同窓会の発会式を執り行うことになった。

一九〇八（明治四一）年一月六日、発会式が開催され、北条校長をはじめとする全教員、さらには高等師範学生の校友会代表の松原厚以下一〇数名が参列した。本会結成の経緯については、幹事の一人であった中川が次のように述べている。¹³

我が広陵の地に一新家庭を開かれて以来、蔽にして而も寛なる父上、懇篤にして而も誠意ある母上達の教育の下に肥立ち、今や社会に出でて活動する同胞は已に齡三を加えんとして居ります、北海道より西韓国に至るまでの間に散在せる同胞が、活動する朝あると共に已に家庭を思い浮ぶる夕あるは、自然の情であります、これが即ち吾々が今回此の同窓会なるものを組織せんと企てた所以であります

「北海道より西韓国に至るまでの間に散在せる同胞が、活動する朝あると共に已に家庭を思い浮ぶる夕あるは、自然の情であります、これが即ち吾々が今回此の同窓会なるものを組織せんと企てた所以」とあるように、情によってはぐくまれた結合体こそが同窓会であると

指摘する。なお「尚志」については、北条校長は次のように述べる。¹⁴⁾

尚志トハ出典アル語ニシテ皇子蝨ノ士志ヲ尚クシ志ヲ成ス間ニ彷徨シテ歴史ヲ形成セリ。現世ニ於テ吾人ノ世ニ立ツ所以、又世ニ対シテ事ヲ為ス所以ハ、猶ホ志ヲ尚クシコレヲ成スニ過ギズ(中略)サレバ本会員諸君ニ於テモ功ヲ樹テ名ヲ世ニ成ス人モアルベク、又功名ヲナスニ至ラズトモ、神明ノ照覽セラルル事業ニ従事シテ遺憾ナク、本校ノ卒業生トシテ不足ナキ生活ヲ遂グル人モアルベシ(中略)此ノ意味ヲ以テ同窓会ニ尚志ノ二字ヲ冠ラルルハ適当ノ意味ヲ有スルコトト信ズ

会員の相互連帯を図るために同窓会を結成し、志をもちながら、切磋琢磨できるような有能な人物になることを期待し「尚志」と命名されることになった。

一九一三(大正二)年五月一五日、幣原はそれまで文部省視学官兼東京帝国大学教授であつた職から離れ、広島高等師範学校第二代校長に就任した。同月二九日に着任式が開催された。「就任の辞」として幣原は次のように述べている。¹⁵⁾

北条前校長今回東北帝国大学総長ニ任命セラレシニツキ、計ラズモ余ガソノ後任ヲ命ゼラルルニ至レリ。元来我が国師範教育ノ目的ハ晒トシテ日星ノ如ク、万民ノ熟知スル所ナリ。カカル学校ニ職ヲ奉ゼシ余ハ、唯誠心誠意ソノ事ニ従ハントス。諸君亦其ノ分

ヲ尽シ、一致協同以テ国家ノ為ニ尽瘁セラレンコトヲ望ム

師範教育について幣原は「万民ノ熟知スル所ナリ。カカル学校ニ職ヲ奉ゼシ余ハ、唯誠心誠意ソノ事ニ従ハントス。諸君亦其ノ分ヲ尽シ、一致協同以テ国家ノ為ニ尽瘁セラレンコトヲ望ム」と述べているように、師範教育の重要性を指摘しながら、その教育に尽力していく所信を伝えている。

また、同校内に「德育専攻科」が設置され、高等師範学校本科文理科卒業生、帝国大学文科大学卒業者らを対象に入学試験を実施し、合計一五名の学生が入学を果たしている。前掲雑誌第三〇号に所収されている「德育専攻科に就て」という記事のなかで幣原は次のように述べている。¹⁶⁾

本校の卒業生も学力経験共に優秀な人材が入つて来たのである。これ等の人々が、よく此の意を体して、大いに勉強して、どうか国家有用の人となつてくれる様にと囑望する所が深い(中略)又かくの如き本校卒業生の先輩が、再び学生として本校に入つたのであるから、現在の学生の先頭に立ちて、大に校風の發揮につとめてくれ堅実なる校風の發揚が出来るのを希望することも大いなるものである

同科に入学した「優秀な人材」に対し、彼らに「国家有用の人となつてくれる様にと囑望する所が深い」だけでなく、同校卒業生ともに「大

に校風の發揮につとめてくれ堅実なる校風の發揚が出来るのを希望する」と発言している。

転任先の広島高等師範学校において、幣原は「德育」の重視を掲げ、在職教員・学生らに対し校風の養成・發揚を主張した。それは自らの経験から培われた思想に内在したものであり、高等師範学校において実践をしようとしたことがうかがえる。

そのようななかで、当時の広島高等師範学校では、「存廃問題」が話題となっていた。幣原は、広島高等師範学校同窓会（尚志会）を中心に、東京高等師範学校の同窓会（茗溪会）との連絡を密にしながら、「廃止反対運動」に力を注ぐことになった。彼は師範教育の重要性を説き、高師（高等師範学校）の存立を声高に主張した。彼の考えはやがて同校教職員、生徒らにも影響を与えることになり、以後高師廃止の問題も収束にむかうことになる。

校長として幣原は、教育研究活動を充実させることに努めるようになった。校友会さらには教育研究会、国語漢文学会、地理歴史学会、英語学会などを相次いで立ち上げ、同校の教職員により組織させ、積極的に専門的研究を行うことにも努めた。

また雑誌『学校教育』の創刊や「ペスタロッチ研究会」の設立、同校附属の「教育博物館」の設立にも尽力したのはその一端である。また『尚志同窓会誌』においても、彼は「德育」の重要性を指摘したり、「寄宿舎」教育の必要性を説いたりするなど、学校教育に関するさまざまな提言を行い、中等教育の充実に貢献していた。

〔五〕同窓会員からの送辞

幣原の校長退任について、同窓会員はどのように感じていたのか。同窓会員であり済美学校校長を務めていた小竹森捷治は、次のように幣原のことを回顧している。¹⁷⁾

幣原校長を懐ふ

別別のものが『同一の働き』の上に現れるとき、之を組織と解する。広島高等師範学校の学校組織とも見るべき学校長と言ひ、職員といひ或は生徒或は又尚志同窓会員といふ各別個のものが、夫々別個でありながら何れも国家創校の始に反つて働く所に全体が組織である。

今回此組織の中核とも見るべき第二祖師幣原校長を失ひ去るといふことは、当の学校の現状の上から見ても、殊に斯かる本来人格的体系である広島高等師範学校の教育組織其者の上から言つて最も不都合なことであると言はざるを得ない。実に全態にとつて癒しがたき創傷である（中略）先生がこの働きに対する絶大なる帰依は、先生自らを化して政治家とならしめたのである。組織としての我等は先生をこの帰依の裡に送つたのである。余が今の済美学校に赴任の途次母校を訪れたのであったが先生は既に校門を離れて遠く御下降の途上であつたが、態々歩を転じて校長室に伴はれ、今は事頃は失念したのであるが、懇々たる御声咳は今尚鮮かである。

小竹森の回顧によれば「先生がこの働きの対する絶大なる帰依は、先生自らを化して政治家ならしめたのである。組織としての我等は先生をこの帰依の裡に送つたのである。余が今の済美学校に赴任の途次母校を訪れたのであったが先生は既に校門を離れて遠く御下降の途上であったが、態々歩を転じて校長室に伴はれ、今は事項は失念したのであるが、懇々たる御声咳は今尚鮮かである」と振り返り、改めて幣原校長の薫陶ぶりを語っている。同窓会の組織にとつてもまさしく「中核」の存在であった幣原の高等師範学校長退任は、同窓会員にとつても大変寂しいものに映っていたのであろう。

同じく同窓会員であった小林致哲は「先生と別るる時」と題する送辞の中で次のように述べている。¹⁸⁾

七年後の今日に於て考ふるに学校に於ては生徒の増員が実行せられ、徳育専攻科、教育科が増置せられ更に曩頃よりは普通教育振興の急務なるを主張し、高師昇格の必要を天下に唱導して、更に「学校の大々の発展をなさんとして居る。七年の歲月必ずしも長しとせざるも、此七年の前後を考へ合す時実に隔世の感なき能はずである。北条先生は我校の創設に当られた。幣原先生は第二校長として此を継承せられた。創設も大事なり。然れども継承亦創設に劣らざる至難である。創設に成効し継承に失敗するは屢見の歴史なるが幣原先生は単なる継承にあらずして更により以上の発展を実現せられたる事實は実に先生の功績偉大なるを深く感ぜしめるのである。先生は又我々同窓の発展につき日夜尽瘁せられ

た事は今更いふ迄もないが、時には教授を派して地方卒業生の活動の實際を視察せしめられ、又時には親ら出られて指導奨励をされた事も屢々であった。今日千有四百の同窓が各々其所を得て分を渴し得るは実に先生御薫陶の賜に外ならぬのであって、吾々の最も感謝措く能はざる所である。先生は植民地教育に深き造詣を有せらるゝ事は已に周知のことなるが、御在職中公務御多端の時をさきて朝鮮に満州に洽く視察せられ、近く昨年は御病後静養尚忽にすべからざる時をも顧みられず、遠く南北支那を巡察せられた。此は必ずしも先生の御研究の爲にあらずして全く卒業生発展の爲なるを思はざるべからず。先生が常に吾々に語られた事はかの未開地の開拓に身を投ずべき教育志士の出現を期待せられて居た事である。吾々は先生の此御精神を深く脳裡に収め、他日大に先生の志に副ふべく努力したいものであると思ふ

小林は「幣原先生は第二校長として此を継承せられた。創設も大事なり。然れども継承亦創設に劣らざる至難である。創設に成効し継承に失敗するは屢見る歴史なるが幣原先生は単なる継承にあらずして更により以上の発展を実現せられたる事實は実に先生の功績偉大なるを深く感ぜしめるのである」と述べ、初代校長北条の後継として、同窓会の「継承」に尽力した人物としての功績をたたえている。また「先生は又我々同窓の発展につき日夜尽瘁せられた事は今更いふ迄もないが、時には教授を派して地方卒業生の活動の實際を視察せしめられ、又時には親ら出られて指導奨励をされた事も屢々であった」ことをと

り挙げ、同窓生の活動状況を自ら視察し、卒業後の学生の動静についても気にかけた人物のようである。このことは「今日千有四百の同窓が各々其所を得て分を渴し得るは実に先生御薫陶の賜に外ならぬのであつて、吾々の最も感謝惜く能はざる所である」という文言からも理解できよう。

幣原は校長退職後、中国大陸ドイツ領青島に赴任となった。幣原の青島赴任につき「尚志同窓会誌青島支部」の設立がなされることになった。その事情について、同窓会誌では以下のように伝えている。¹⁹⁾

◎支部発会

青島在職尚志同窓会員は八月五日幣原名誉会長の渡青を機とし青島支部発会式を挙げ、左の如き支部規約を規定せる旨報告に接す。

尚志同窓会青島支部規約

第一条 青島支部ハ青島及山東鉄道沿線在住ノ尚志同窓会員ヲ以

テ組織ス

第二条 当支部ノ事業左ノ如シ。

一、本部トノ連絡。

二、母校関係者ノ歓迎等斡旋。

三、会員相互ノ親睦ニ慶弔。

但シ第二、三項ニ関シテハ別ニ内規ヲ定ム

第三条 当支部ニ委員若干名ヲ置ク。

同窓会組織に功績をもたらした幣原の同窓会長退任後も、「青島支部」

は「青島及山東鉄道沿線在住ノ尚志同窓会員ヲ以テ組織ス」ることになった。また「一、本部トノ連絡。二、母校関係者ノ歓迎等斡旋。三、会員相互ノ親睦ニ慶弔」を活動の中心におき、尚志会の国内外の活動を展開することになったのであろう。

〔六〕おわりに 高等師範学校長在職までの幣原における教育

思想

以上のことから次の二点が明らかになったと考える。

①幣原の学校教育論は、德育を中心とした教育論であった。とりわけ德育を進めていくうえで、「気風」・「校風」の養成および発揚を主眼としていた。教育行政家としても活躍する一方で、現場復帰を果たした彼は、広島高等師範学校第二代校長に赴任し、教師を嘱望する青年らに師範教育を実施した。そこでも「校風」をもたらし、継続させていくという主張をした。この教育実践は著書『学校論』のなかに集約されていた。『学校論』は、彼の学校教育論が内包されたものであった。

②また「同窓会」について校風発揚の場であると指摘し、同窓会の活動にも積極的に関与した。日本を離れることになって幣原の功績を賞賛し、尚志同窓会の組織を青島の地に設置した。そこで支部活動としてさらなる同窓会組織を構築していった。

わずか七年間の広島高等師範学校の校長の在任期間ではあったが、会員からも親しまれていた様子であった。幣原の德育の考えは、校

長退職後の活動にどのように影響したのか、また植民地教育の任に当たってからの彼の考え方との関係性はどのようなものであったのかについては、今後さらに深く掘り下げる必要性があると思われる。このことについては今後の研究課題としたい。

注

- (1) 唐澤富太郎編『図説 教育人物事典 日本教育史のなかの教育者群像』(中) ぎょうせい、一九八四年、五四八～五五〇頁。彼は、教育者や教育行政家であっただけでなく、一九二〇年には文部省図書局長、台北帝国大学の創立事務官、一九二八年には同大学総長となっている。同大学退職後は、興南錬成院長にも就任している。また著書には、『南東沿岸史論』、『韓国政争誌』、『朝鮮史話』、『植民地教育』、『世界の変遷』、『南方文化の建設へ』等多数存在する。なお広島大学五十年史編纂室編『広島大学五十年史』(通史編、二〇〇三年)においても彼の功績などについては、客観的記述にてまとめられているのみである。
- (2) 幣原坦『女子教育』集英堂、一八九八年、一四四～一五二頁、国立国会図書館東京本館所蔵資料。
- (3) 同上、一五五～一五六頁。
- (4) 幣原坦『教育漫筆』金港堂書店株式会社、一九〇二年六月、八三～八四頁、国立国会図書館東京本館所蔵資料。
- (5) 同上、九四～九五頁。
- (6) 同上、九五～九六頁。
- (7) 幣原坦『学校論』【復刻版】東京同文館、一九〇九年、三八頁。広島

大学附属図書館所蔵資料。

- (8) 同上、五九～六〇頁。
- (9) 同上、二六九頁。
- (10) 「幣原名譽会長の辞」『尚志同窓会誌』第二一号(合本)、奥書欠、一九一五年と推定、広島大学文書館資料室所蔵資料。
- (11) 足立武樹「幣原校長歓迎会の記」同上第二六号(合本)、奥書欠、一九一七年と推定、広島大学文書館資料室所蔵資料。
- (12) 「尚志会創立八十周年記念」社団法人尚志会、一九八七年、二五七頁。
- (13) 同上、二六〇～二六一頁。
- (14) 同上、二六一頁。
- (15) 同上、二六六～二六七頁。
- (16) 幣原坦「德育専攻科に就て」『尚志同窓会誌』第三〇号(合本)、一九一八年六月三〇日、広島大学文書館資料室所蔵資料。
- (17) 小竹森捷治「幣原校長を懐ふ」同上第三四号(合本)、一九二〇年七月三日、三五～三七頁。広島大学文書館所蔵資料。
- (18) 小林致哲「先生と別れる時」同上、一九～二二頁。
- (19) 「支部発会(青島)」同上第三三号(合本)、一九一九年二月一七日、四一～四二頁、広島大学文書館所蔵資料。

(たなか たくや・吉備国際大学)